

## The Institute for World Literature 2019 参加記

ボストン 2019

2019 年 7 月 1 日～7 月 25 日

於 ハーバード大学

岩佐 頌子（東京大学現代文芸論修士課程）



図書館前での集合写真（IWL 公式カメラマン Bill Chapman 撮影）。

この The Institute for World Literature（以下 IWL）参加記は、2 種類の読者に向けて書かれている。まず、今後 IWL に参加することを検討し、具体的なアドバイスを求めている方へ。そして残りは、私のごく個人的な IWL 体験を聞いてやってもよいという奇特な方にむけて。まず、前者の方は 2 段落から 10 段落目まで読んでほしい。逆に後者の方は、それ以降から読み始めて頂ければ幸いである。

IWL とは、ハーバード大学比較文学科の David Damrosch 先生を中心として行われる「世界文学」を学ぶための約一カ月にわたるサマープログラムである。世界各国から集まった若手の研究者（博士課程の学生が中心）が、14 個あるセミナーのうち 2 つを選択し、ディスカッションと小さな授業内発表を通して学び合う。加えて、専門領域の近い参加者が集まり、それぞれが 20 分程度自身の研究に関するプレゼンテーションを行うコロキウムへの参加も必須である。また、週に何度かはゲストや教授陣による全体講義が存在する。ちなみに、今回掲載した写真はそれぞれ、集合写真とセミナーの様子である（撮影はすべて IWL の公式カメラマンによるもの）。

はじめに、申し込み方法と宿泊先、そして授業それ自体へのアドバイスをいくつか書いておきたい。ただ、IWL 体験記はこれ以前に優れたものがいくつも書かれていることは述べておくべ

きだろう。特に、『れにくさ』第7号に掲載されている阿部幸大さんの体験記はハーバード大学で実施されたIWLについての内容であることに加え、プログラム全体の概要をかなり丁寧に説明して下さっていたので、大変参考になった。もちろん、他の体験記もそれぞれ異なった観点から重要な情報を教えてくれるため、IWLへの参加を希望する人はぜひ読んでほしい。

それでは、ここからは私の体験記に話を戻そう。まず申し込みについて。最も大変なのは英語のサンプルエッセイの提出と思われるが、字数やテーマに特に制限はないので、今までに書いたものがあればそれを送ればよい。だが、以前に書いたものも提出までの時間もないという場合も、字数を気にしすぎずに、とにかく何かを書いて送ることをお勧めする。

受講するセミナーに関しては事前に慎重に選んでおくべきだが、現地で実際に受けてみて、どうしても自分には合わないと感じた場合は、本部に相談すれば変更してもらうこともできる。ただ、人気のセミナーは定員オーバーになっている場合もあるし、授業内発表の割り当てを初回授業より前にメール等を使って決めるセミナーも少なくないので、やはり事前にしっかりと選んでおくべきだろう。

次に、宿泊する場所について。IWL側からいくつか候補を提案されるが、決して安いわけではない。そのため、私はAirbnbという民間の宿泊先を探すウェブサイトをつかって宿を決めた。これを使えば比較的安く泊まれるが、注意点が2つ。1つ目は、IWL時期の開催地は非常に混雑する可能性があるため、早めに予約をしておかないと良い宿泊先は埋まってしまうこと。2つ目は、ホスト側から突然キャンセルされた時に何の保証もしてもらえないこと。現に私と友人は出発1週間前に突然予約を取り消され、新しい宿を探すはめになった。

そしてこれは個人的な意見だが、宿泊先にはキッチンとエアコンがあると便利だ。ボストンは物価が非常に高いので、私のようにお金のない院生は、毎回外食しているとあっという間に破産してしまうためである。そして、IWL開催時期は非常に暑い。友人の1人はエアコンのない部屋に泊まり、毎日実家に帰りたいたと嘆いていた。

具体的な授業について。英語が苦手だという自覚のある人にとって、一番恐ろしいのはこのセミナーかもしれない。たしかに、参加者は怒涛の勢いで発言するのに加え、様々な言葉のアクセントが入り混じった英語は聞き辛く、私も非常に苦しい思いをした。だが、きちんと準備をしていけば、ある程度は対応ができる。そして準備とはいわずもがな、テキストを事前にしっかりと読んでいくことである。テキストの内容がわかれば、ディスカッションの内容も想定しやすく、発言したい内容を事前に考えておくこともできる。しかし、1日の授業のために毎回50～60ページを読むことが求められるため、現地で一から全て読むのはなかなか難しい。だからこそ、IWL側から事前に送られてくるテキストのPDFを活用し、日本にいる間に少しでも読んでいくことを強く勧める。

コロキウムに関しては、PowerPointかハンドアウトを用意していく方がよいだろう。何人かの参加者は自分の手元の原稿を読み上げていただけだったが、普段は英語を使っていない参加者が多いために、あまり評判はよくなかった。そして、コロキウムでは多くの場合、発表とコメンテーターをそれぞれ1回ずつ担当することが求められる。発表の準備を忘れる人はいないと思うが、コメンテーターの準備もしておいた方がいい。具体的には、コロキウムのリーダーか発表者本人から、アブストラクト、もしくは発表原稿をもらっておくとよいだろう。私はコメンテーターの存在を完全に忘れており、しかも第1回目の発表者の担当だったため、冷や汗を滝のように流し

ながらプレゼンテーションを聞いた。

最後に、IWLにはオフィスアワーという、教授たちと個別で話せる機会が存在する。自分の参加しているセミナー以外の教授に会いに行くことも可能なので、ぜひ臆せず利用してほしい。ただ、もらえる時間はあまり多くはないので、事前に質問を考えてから乗り込む方がよいだろう。

以上が、IWLに参加したい人が知っておくとちょっと便利だと思われることである。さて、ここからはより個人的なIWL体験記にしたい。私が参加したセミナーは、Rebecca L. Walkowitz先生の“Close Reading and World Literature”と、Mariano Siskind先生の“About the End of the World: Crises of Cosmopolitanism in Contemporary Culture and Theory”の2つである。それぞれのセミナーについて、少しだけ話したい。

前者のセミナーでは、「世界文学」とは何かをさまざまな角度から問い続けた。毎回のセッションには小題がついており、最初のタイトル“What is Reading?”から一貫して、「○○とは何か？」という疑問形で始まり、「読むとはなにか」「モノリンガリズムとは何か」といった世界文学を考える上では欠かせない概念それ自体を毎回の授業で改めて考える。そしてこのセミナーの一番の魅力は、概念の検討を終えた後、今一度具体的な作品分析にもどることだろう。例えば「母語」とは何かを考えるにあたり、モーシム・ハミッド『コウモリの見た夢』を通して、「ネイティブスピーカー」とは何かを考えた。アメリカを舞台とする同作の語り手はアメリカ人と思われる相手に、一方的に自分の話をし続ける。注目されたのは、彼の英語が非常に丁寧かつ明快であるにも拘わらず、彼の生まれはパキスタンであるために、彼は決して「ネイティブスピーカー」とは認められないことだ。

では、「ネイティブスピーカー」と「流暢な話者」のちがいは一体何だろうか。一番初めに学んだ言語が否か、そういう人がいるかもしれない。しかし、「ネイティブスピーカー」という言葉の中には、デビッド・ベローが『耳の中のそれは魚？』(Is That a Fish in Your Ear?)の中で述べるように、その言語に対する権威者という意味合いが含まれている。彼らはいかに英語を「正しく」話していても、その「正しい」が何なのかを判断することは究極的には許されない。そう考えた時、パキスタンからやってきて、怯えるアメリカ人に対して一方的に話し続ける青年の英語の丁寧さは、不気味であると同時に一種の反抗のようにも思われる。語り手の話す、そこらの「ネイティブスピーカー」

以上に「正しい」英語は、アメリカにおいて「よそ者」であるために、常に周りから評価をくだされ続ける彼の不自由さそのものの表れのように見えるのだ。

世界文学というと、2つ以上の文学作品の比較や、翻訳の問題を念頭におく場合も多いかもしれない。だが、このセミナーを通して、私は世界文学とは「世界」とは何かを



Walkowitz 先生のセミナーの様子 (IWL 公式カメラマン Bill Chapman 撮影)。



問い直すことを通じ、各々が無意識のうちに前提としているイデオロギーの見直しをも迫るものだと思った。そして同時に、2つ以上の文学の大胆な比較を通してだけでなく、1つの作品の精緻な分析の中にも、「世界」を問い直す可能性が無数に存在するという意味で、比較文学だけが世界文学ではないことを実感することができた。

Walkowitz 先生の授業が作品の精読に重きを置く一方、Siskind 先生の授業は終始大きな課題へと向かい続けた。先生が何度も繰り返したのは現実の諸問題の解決に文学がどう貢献できるのか、ということだった。授業冒頭でそう言われた時、私は素直に感動すると同時に少なからず困惑した。文学作品が現実社会と繋がっていることは自明であろうが、文学がそこで生じる問題の解決策を提示することができるとは思っていてもなかなか口に出せない。というのも、思想や理論を学ぶことと、それを何らかの具体的な行動に繋げていくことの間には、大きな隔りがあるからだ。

加えて、このセミナーでは小説や映画よりも、イマヌエル・カントやハンナ・アーレントなどの著作を読むことの方がずっと多かった。アメリカの比較文学科では哲学書を読むことが多いとは聞いていたが、そうはいっても具体的な文学作品のあまりの少なさに少し驚いた。

では、私たちのセミナーはなぜあのような形式でなければならなかったのか。現実の社会問題に対して、より直接的な解決策を打ち出そうとしているのは、小説作品よりもカントやデリダの言葉であろう。だからこそ、セミナーの中では多くの哲学書が取り上げられることとなった。だが参加者の中からも疑問があがったように、そこで話される言葉は抽象的かつ、楽観的に見える場合も多い。だからこそ私たちは一度文学作品を通して、その議論を考えてみる必要があるのかもしれない。具体的な例を1つだけ挙げたい。2017年に出版された、ディーパック・ウニクリシュナン『一時的な人々』(*Temporary People*)では、ビルの建設現場で働く外国人労働者と思われる人々が時たま、今まさに自分が立てているビルの上から飛び降りる。そして作中フォーカスが当たるのは、それを直す仕事に就いた女性だ。彼女はちぎれた体を拾い集め、彼らが働けるよう元にもどす。しかし、時として機材の影などに隠れた死体は見つけられず、そのまま死んでしまうこともある。この作品を我々はどう読むべきか。

壊れても部品を集めれば直るし、いくらでも代わりのいる人々は、まるで機械のようだ。一方で、彼らは時として人知れず絶望し、自ら命を絶つ。その意味で代替可能で修理可能にみえる彼らは決してただの機械ではない。この作品をただのホラーとして読むこともできるかもしれないが、彼らに対する異様な認識のされ方は、移民として生活する人々の直面する現実の一側面として読み取ることもできるはずだ。

Siskind 先生の「小説は歴史的状況の表層を映し出すものである」という言葉にあるように、文学作品は現実の写し鏡ではない。そこで扱われるのは、非常に個人的な物語と、あまりに大きすぎて現実感を伴わない大文字の「世界の諸問題」の間にある現実の一部分を強調した物語だろう。その意味で文学作品は、抽象的すぎる思想と、例外を含みすぎる現実を結ぶ結節点になりえるのではないだろうか。Siskind 先生に導かれながら多くのディスカッションを重ねる中で、私はそう思わずにはいられなかった。

以上が、私の IWL 参加記である。楽しいことばかりとはいかなかったが、IWL での学びは紛れもなくこの特殊な空間でのみ得られるものだった。世界文学を学ぶことは、世界とはなにか、という問題に答えることから常に始められているように思われる。そして世界文学的想像力は、

【参加記】

岩佐 頌子

コスモポリタニズムの危機と言われる時代のなかで、いかに他者を自分の世界の中に取り入れていくか、そしてそこにはどのような問題が存在するのか、を考えることにまで続いていく。だからこそ、世界文学は今一度見直され、拡大され、学びつづけられるべきなのだろう。

そして最後になってしまったが、IWL を筆頭に、今までさまざまな未知の体験への可能性を私に開いてくださった沼野先生には感謝の気持ちでいっぱいだ。一つ一つの経験は、さまざまな形で私の力や支えになっています。本当にありがとうございました。